

② 加納夏雄死去

明治三十一年二月三日、彫金科教授加納夏雄が死去した。七十一歳。五日、谷中墓地に埋葬。本校教員、生徒も多数葬儀に参列した。

夏雄は文政十一年に山城国に生まれ、天保十一年に大月派金工家池田孝寿に入門するとともに円山・四条派の大家中島来章に画を学び、嘉永七年江戸に出て彫金の業を営んだ。明治二年宮内省御太刀御用金具彫刻を命ぜられ、また、同年より造幣局の貨幣極印製作に従事。同十四年第二回内国勸業博覧会の審査官をつとめ、「鯉魚図額」を出品して妙技一等賞受賞。同二十三年の第三回博覧会でも審査官をつとめ、「千羽鶴図花瓶」を出品して前回同様の賞を受け、同二十八年の第四回博覧会では、「松鶴図額」を出品して妙技二等賞を受け、その間、弟子たちとともに多数の小品を製作した。円山・四条派の画法を基礎にして鋭意写生につとめ、独自の意匠を片切彫りの彫金に用いて金工に一生面を切り開き、名声高く、明治二十三年、本校に起用された年に帝室技芸員に任命されている。本校では彫金の参考標本（手板）を数多く作り、清水南山の回想記（48頁参照）が示すように生徒を懇切に指導した。後任には高弟香川勝広が起用された。

なお、夏雄歿後間もなく『読売新聞』（明治三十一年二月七日〜同月十一日）に掲載された「彫刻家故加納夏雄氏逸話」の左記の一節によれば、夏雄は明治三十一年当時反岡倉派ないし本校改革派が主張していた美術・工芸分離論に強く反対していた様子である。

◎ 死に臨んで海野勝珉氏を勵む

海野勝珉氏ハ夏雄が晩年の門下生なり、手腕卓越大に將來の彫刻界に望あり、夏雄死に臨んで私に勝珉を呼び慨然語て曰く「彫刻ハ本朝の美術なり、而して美術と工藝との區域ハ素より工人の手腕による、近時西洋に熱するの説起りて往々斯道を傷け延ひて後進子弟を誤らんとす、吾今瞑せば足下に非ずして誰か又此邪説を破る者あらんや、足下請ふ奮勵せよ」と勝珉涕泣して師が最後の教を聴く

③ 依囑製作に関する嘆願書草稿

岡倉校長辭職直前に作成された文書の草稿。教官個人の依囑製作もできるだけ教室内で行わせ、生徒に見学の便を与えたいという内容である。制約の多い学校教育制度のもとで美術の教育の特殊性を損うことなく教育効果をあげようとする姿勢が感じられる。原文は東京美術学校名入野紙に毛筆で記されており、所々に訂正が加えられている。（ ）は削除された部分である。

明治三十一年三月十六日

庶務掛

校長

教場掛

會計掛

本校生徒實地製作ニ就テハ從來種々計畫致居候得トモ經費ノ不足教室ノ狹隘等ニテ未タ完全ノ設備至ラス漸ク依囑製作ニ由リ其端

緒ヲ開キ現在裨益少ナカラス候処右等事業ノ儀ハ概ネ時好ト依嘱者ノ希望ニ依リ教員ノ意見ハ勿論參酌候ヘトモ(斯ノ如キハ實地製作ニ適セサルモノ間々有之且ツ成工期限ノ短日)同種類ノモノ某科ニノミ傾偏スル等各科全体ノ上ヨリ(往々)遺憾(有之)少ナカラス候然ルニ内外ノ博覽會共進會等へ出品ノ為メ宮内省農商務省其他ヨリ本校教員へ直接依嘱セラル、製作物ハ専ラ技術家自身ノ所長ヲ顯ハスヘキ特殊ノ製作ニシテ獎勵的ノモノニ有之殊ニ本校教員(ノ如キ)ハ當代屈指ノ名家ニシテ之レカ製作物ハ直チニ本邦美術ノ代表者タルヲ以テ容易ノ業ニ無之刻苦經營(セサルヘカラサ)シ以テ優秀卓越ヲ希望スル(ヲ以テ)カ故ニ到底依嘱製作ノ比ニ(無之)アラス然ルニ之等ノ製作ハ渾テ本校授業時間以外自宅ニ於テ夜間若クハ休日ノ業トシ生徒ノ如キハ僅々一回若クハ二回教員ノ自宅ニ就テ(見ル)觀觀スルニ止マリ其意匠圖按材料ノ如何製作法等最モ必要ナル点ハ(見)得ルニ因ナク眞ニ遺憾ノ儀ニ有之候故ニ之等製作物ハ本校教室及ヒ授業ニ差支無之限リ材料及ヒ用具ノ區別ヲ明カニシ(二字不明)決シテ學校品ト混交セサル様致シ生徒實地製作ニ有益ト認メルモノハ本校教室内ニ於テ製作セシムル様致度既ニ佛國(博)博覽會へ出品ノ製作品ニモ時期接迫ノ折柄ニ付至急御許可相成候様致度此段仰裁可候也

年 月 日

④ 美術学校騒動

(一) 岡倉校長辭職

明治三十一年三月二十二日、岡倉覚三は帝國博物館理事兼美術部

長の職を辭し、次いで同月二十九日、本校校長を辭任した。岡倉が日本美術の創造的復興を目標に掲げて本校を設立し、献身的に運営にあたったことはすでにみてきたとおりであるが、その努力によって本校の基礎ができ、新たに發展しようとしていたとき、突如辭職を余儀なくされたのであった。辭任演説の中の「予ハ好んで自ら去るを屑よしとする者に非るなり」(32頁參照)という発言には業半ばにして官途を去る無念の思いが込められている。辭職の原因についてはさまざまの見方がなされてきたが、岡倉自身は次のように述べている。

一八九六年、この學校に西洋画と西洋彫刻の課程を加えることを命じた。この時以後、學校の運営について、主として西洋式方法の果たすべき役割をどの程度まで教科課程に認めるかという点でさまざま意見の食い違ひが起こり、一八九六年には遂に分裂するまでにいたり、岡倉、雅邦、觀山、大觀、覺弥、紫水、雪声、広業、如雲、古拙、千虎、香雪、その他の人々が職を辭して、同じ年に日本美術院という名の私立の美術施設を設立することになったのである。

上野の美術學校は、その時以後、西洋派の部門を大きく拡大して、もっぱら西洋派を中心とするようになった。(下略)

(岡倉覚三「現代日本美術について」『覚書』「Notes on Contemporary Japanese Art, By Prof. K. Okakura. The Studio. Vol. 25, No. 108, London 高階秀爾訳。『岡倉天心全集』第二卷。昭和五十五年。平凡社)